

『おねーさんの耳はロボの耳』 第五話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

これまでのあらすじ

来栖川本社の意向によって、感情制御システムの改造が行われることになったHMX13型セリオ。その改造を終えて、浩之とマルチが平和に暮らす家に何の前触れもなくやって来たセリオは何と「セリオおねーさん」として、強引に彼らと同居することを告げた。

そんなある日、「幼なじみ」のあかりも参戦し、「打倒セリオ！」を掲げて母親を巻き込み（巻き込まれ）創作料理に（強制的に）没頭していた。

その頃、浩之はセリオの「口移しでの食事」について実践を伴う説明を受け、マルチにもそれをやってもらったりと、普段とはかなり違った食事を堪能していたのだった。

8. 料理対決！

あかりが浩之たちの前に姿を現したのは、以前にセリオと出会って以来実に一週間以上が経過していた頃だった。

あかりはある日に、セリオが夕食を用意してる最中に突然やって来た。

“ピンポン”

「あ、わたし、出てきますー」

と玄関の呼び鈴にマルチが反応して玄関に行ったところ、しばらくしてマルチの叫び声が聞こえてきた。

浩之が慌てて玄関に行ってみると、そこには倒れているマルチと、虚ろな目つきをしたあかりらしき人物がいた。らしきと言うのは、その人物があかりの特徴だったリボンと同じ髪型をしていたからであって、それ以外にはそれがあかりだと断定するのは難しいほど、印象が違っていたのである。

「お、おい、マルチ？ それに…お前、あかり…なのか？」

怪訝そうな表情で、玄関にいるあかりらしき人物に声を掛けながら、あらためて確認すると、虚ろな目つきと何だかげっそりとしている風体に、可愛らしい服が奇妙な取り合わせを成している。

「……ひろゆきちゃん……」

弱々しい声だった。だが、それは確かにあかりの声だった。

「……これ、つくったの……」

「おい…、大丈夫かよ？」

「…いっしょうけんめい、つくったの。だから…たべてね…」

浩之の言葉は全然耳に入っていないようで、手に持っていた重箱らしきものを浩之の方に差し出すだけだ。

「おいおい…何かお前あぶねーよ？」

と、浩之が言っても、あかりはぶつぶつと口の中で繰り返すだけで、それ以上の会話は

成り立たない。

ますます心配になった浩之が、台所の方に向かって、

「おい、セリオー！ ちょっと来てくれないか、あかりの様子が変なんだ」

と言った瞬間。

それまで虚ろな目つきで、ぶつぶつと繰り返すだけだったあかりに異変が起きた。

「セリオ：ちゃん？」

そうつぶやいた直後、あかりの目に生き生きとした輝きが戻り、さっきまでげっそりしていたように感じていた身体も、いつも以上の健康そうなツヤと張りを取り戻して行った。

そして、力強く言い放つ。

「セリオちゃん！ 勝負よっ！」

と、ちょうどそこにセリオがエプロン姿でやってきた。

「一体どーしたって言うの？ 浩之さん」

あかりの豹変ぶりにすっかり言葉を失ってしまった浩之は、ただ何も言わずにあかりの方を指差すだけだった。

「あら、あかりさん、お久しぶりですね」

セリオがにこやかに挨拶すると、強い調子でいたあかりにわずかな変化が見られた。

「現われたわねっ！ ……って、あれ？ セリオちゃん…なの？」

「ええ、セリオだけど、何かご用かしら？ それにこのありさまは一体何があったのかしら？」

すっかりいつものおねーさん口調になっているセリオを見て、あかりは激しく動揺して

いた。

「え？ だって、この前見た時はもつと普通だったけど？ な、何で？ で…でも、でも、わたしはセリオちゃんと料理の勝負に来たんだよ？ あれ、このセリオちゃんって一体？」

先ほどの氣勢はすっかりどこかに行ってしまった、あかりの頭の周りには疑問符が多数泳ぎ回っているらしい。いくらセリオが話そうとしても、ただうろたえるばかりで、まともな会話など望むべくもない。

「マルチはマルチで止まったままだし、浩之さんも呆れ果てるみたいだし、あかりさんは何が何だか分からないし…。誰か説明してくれないかしら？」

と、セリオが浩之の方に視線を向けてみたが、浩之は相変わらず何も言ってくれない。そうなる、もはや状況は絶望的だ。

「やれやれ…。このままじゃあしょうがないから、とにかくあかりさんを静かにさせないと行けないわね」

セリオはそう言いながら、未だに「あれ？ あれ？」を連発してるあかりに笑顔ですつと近づいて行った。

「あかりさん、ちよつとごめんさいね」

と最上級の優しい笑顔を見せながら、あかりのみぞおちを正確に突いた。

「あれっ？……」

と最後まで疑問符を浮かべながら、がっくりうな垂れるとあかりはようやく静かになった。しかし、その手に持っていた料理の入ってるらしい重箱だけは、気絶してなお手放さ

なかった。そして、見事な当て身をやってみせたセリオに対して、ようやく浩之が言葉を発した。

「セリオ…お前、そんなことも出来るのか…」

「まあ、専用モデルほどの力とスピードはないし、長時間は無理だけど、素人格闘家の相手くらいなら出来るわよ。何なら一度試してみる？」

「いや、結構…」

その後、セリオはあかりとマルチを居間まで運び込み、いちおうは平静を取り戻すに至る。ただ、浩之はその時もずーっと考え込んでいた。

（セリオって、あんなに強かったのかあ…。これまで力の対決を挑まないでよかったと言うのか何と言うのか…）

あかりをソファに、マルチを床に（と言っても、カーペットが敷かれているので無用な心配をされないように）寝かせて、相変わらず考え込んでいる浩之に向かってセリオが尋ねた。

「それにしても、一体何があったの？」

「ん？ ああ、俺もよく分からないんだけど、マルチが玄関に行ったら悲鳴を上げて倒れてさ」

考えごとを中断してセリオに答える浩之だったが、実のところ浩之にも事情が飲み込めない。

「それで？」

「で、俺が見ると、げっそりとして虚ろな目つきのあかりがいた…と言うわけなんだけど

な

浩之の言葉を受けて、セリオはちらっとソファで寝ているあかりを見る。よく見れば確かに少し痩せているような気もするが、浩之が言うほどにげっそりとはしていない。

「…全然そんな風には見えないけど？」

「うーっむ、確かにそうだけど…。そうか、セリオの名前を呼んだら、急にあかりが元気になってだな」

「後はわたしが見た通りとゆーわけね」

「そうそう」

「そう言えば、あかりさんは勝負とか言ってたみたいだけど？」

「ああ、そう言えばそうだな…。ま、どちらにしても、目が覚めるのを待つしかないだろ？」

と浩之が言っていると、マルチが目を覚ました。正確にはブレーカー作動状態から復帰したと言うことになるが。

「うゝん、あれ…あかりさんは？」

起きるなりあかりのことを尋ねるマルチに、セリオが手振りであかりの方を指差す。そして、マルチが示された方を見ると、そこには静かに寝ているあかりの姿があった。

「あれ？ あかりさん…普通に戻ってますねー」

あかりの寝姿を見て、マルチが不思議そうな表情でそうつぶやいた。どうにも釈然としないらしいが、それでもあかりの身を案じていたらしく、あかりのそばに近寄って心配そうな表情を作る。

「あかりさんは大丈夫なんでしょうか？」

「さあ…。セリオの見解はどうだ？」

マルチの質問に浩之が答え、そのままセリオへの問いに変わって行く。

なお、浩之がセリオの見解を求めた理由は、セリオはそのデータベースによって医療知識も豊富なためである。実際の医療現場に立つとしたら准看護婦扱いではないが、知識としては看護婦以上なのである。もっとも、メイドロボが医療現場に立つことは非常に少ない。

「そおねえ、ちゃんと見てるわけじゃないからはっきりとは言えないけど、極度の疲労を精神の昂揚によって補ってるよーな感じがしたけど…」

「ふうん…。つまりは凄く疲れてるのを気力で持つてる…よく言う徹夜明けのハイテンション状態なわけだ」

「平たく言うと、そーなるわね。ま、それだけじゃないかも知れないけど」

浩之の意見をおおむね肯定しながら、セリオは今一つ府に落ちない様子を見せていた。

「何か気になることでもあったのか？」

「ええ。さっきあかりさんに当て身を食らわせた時に、ちょっと気になる臭いがあったのよ」

「気になる臭い？ それって…」

真剣な表情のセリオに対し、浩之はつい下らないことを言おうとしたのだがそれはセリオに読まれていた。

「下品な冗談はやめておいてね、浩之さん」

「あうっ…」

セリオの冷たい一言で釘をさされ何も言えなくなった浩之と違って、マルチはあかりの身体に顔を近づけて、臭いを嗅いでみた。

「何か臭うんですか？」

鼻をくんくんと動かしながら、一生懸命マルチがその臭いを嗅ぎ分けようとするのだが、マルチにはそこまでの能力はない。

「うーん、本当に微量なのよね…」

セリオが苦笑気味に言うと、ようやくマルチもあきらめた様子で、すっと顔を上げた。

「わたしにはさっぱり分かりません」

マルチに分からないのだから、当然浩之にもその臭いは分からない。

「何の臭いだと思うんだよ？」

浩之が怪訝そうにしてセリオに尋ねると、セリオはやや声を低くして、その答えを告げる。ちなみに、声を低くする理由は、その方が臨場感があるからでそれ以外の理由もメリットもない。

「…麻薬…とは言わないけど、常習性と精神昂揚効果を伴う希少な調味料。日本じゃ普通は手に入らないはずだけど」

「げげっ！」

セリオの作り出した雰囲気そのまま乗せられた浩之が、眉間にしわを寄せて険しい表情を作ったのに対して、マルチの反応は相変わらずズレていた。

「それっておいしいんでしょうか？」

「マルチ：そりゃヤバイって」

呆れた調子で浩之がつぶやいても、マルチにはことの重大さが実感できないらしい。

「そーなんですか？ でも、あかりさんから調味料の臭いがしたって言うことは、それを使っていたと言うことじゃないんですか？」

マルチにしてはまっとうな推理である。：つと、念の為に補足しておくが、別にマルチがアホとかバカとか言うのではなく、発想の方向が若干セリオや浩之と違っているだけなのだ。電子頭脳の性能はマルチも高い：はずである。

「多分そーね」

「つてことは？ あかりが持ってきた料理の中に使われてるのか？」

「その可能性は極めて高いわね」

「オイオイ、これじゃどー考えてもコメディの展開じゃないぞ：」

さらりと予想される事実を述べたセリオの言葉に、思わず冷や汗を流す浩之だが、展開うんぬんについてはまったく余計なお世話だ。

「ま、少ししか食べてないなら、まだ軽いけど：。ちよつと辛いかもね」

「禁断症状か？」

「食欲が旺盛になるのよ」

至って真剣に説明するセリオだったが、浩之の反応はかんばしくない。

「：：そのどこが辛いんだよ？」

「あら、若い女性だったらダイエットに苦しむことになるし、健康な男性だったら食費が馬鹿にならないのよ」

呆れている浩之に、セリオは「心外ね」と言う表情を作り、反論するのだった。

「何か急に話がほのぼのしてきたな」

と、そこにマルチが声を上げる。

「あ、あかりさんが目を覚ましたようですよ」

「うくん……。セリオちゃんが…浩之ちゃんがあ…」

マルチの声に続き、あかりの声もする。が、まだ完全には目が覚めていないよう、どう見ても悪夢にうなされていようだ。

「…なあ、それって、幻覚症状もあるのか?」

「ないはずよ」

しばらくして、あかりが目を開いた。どうやら、完全に目が覚めたらしい。

「あれ?? どうしてわたし、ここにいるんだろ…」

周囲を見回しながら、あかりがそうつぶやいたところに、浩之が声を掛ける。

「おい、あかり」

すると、あかりはわずかにはつきりしない顔つきながらも、笑いながらそれに答えようとする。

「あ、浩之ちゃん。久しぶりだね」

「久しぶりだね、じゃないぜ。まったく、いきなり来たと思ったら、今にも死にそうな顔をしてたんでびっくりしたんだからな」

「死にそうな顔? わたしが?」

浩之に言われたものの、あかりには明確な記憶がないらしく、自分の様子を見て驚きの

表情を見せた。

「あれ：そう言えば何だか痩せたみたいなのがするな……。この辺も寂しいし」
身体の様子をぐるっと見回して、何気なく胸の辺りに手をやって、そうつぶやくと浩之がすかさず指摘する。

「そりゃ、もとから：うぐっ」

だが、言ったのとはほぼ同時に、あかりのげんこつが浩之の顔面を直撃した。

「浩之ちゃんのバカっ！」

顔を真っ赤にしながら叱咤するあかりに対して、浩之は少し涙目になりながら、言い返す。

「痛い：ラブコメするのはいいんだけど、マルチャやセリオも見てるんだぜ？」

「マルチャやセリオ？」

と、あかりが改めて、周りの様子に気を配ると、

「あかりさん、元気になってよかったですー」

とにこやかに挨拶するマルチャと、

「久しぶりですね、あかりさん」

と苦笑しているセリオにようやく気がつき、気恥ずかしさに顔を真っ赤にして縮こまっています。

「あっ……………ごめんなさい、浩之ちゃん……………」

「それで？　ちゃんと説明してもらおうかねえ」

ようやくあかりがおとなしくなったので、浩之は気を取り直して、この次第を追求し

『おねーさんの耳はロボの耳』第五話

でしたが、あかりはそれには答えずにセリオの方を向いていた。

「つと、ところで、その、セリオちゃんて？」

「何かしら？」

あかりの問いかけに、やはりいつもの調子でセリオが聞き返すと、あかりは両手を頭に当てて、困惑した表情を見せた。

「ああっ、やっぱり前と違う！」

「ガタガタ騒ぐなって。こっちの方が本物なんだからさ」

「え？ 本物って？」

浩之の言葉に、さつき以上にきよとんとした表情で答えるあかり。

「この前は本当に猫かぶってたんだよ、セリオは」

「どーゆーこと？」

どうにも説明が端的で、一向に理解が進まない。それを見て取ったか浩之も単刀直入に言うことにした。

「つまりだな、セリオもマルチ同様に感情を持ったロボットなわけだ」

そこにセリオが補足を入れる。

「正確にはマルチよりも更に進んでるのよ」

だが、それはあかりにかえて混乱を招いただけのようだった。

「え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？ え？」

大きく目を開いて、あんぐりと口を開けたまま、セリオと浩之を交互に見ているだけだ。

「分かったか？」

「ウソお！ だってロボットには感情なんてないから心で勝負すれば勝てるってお母さんが言ってたのに……」

「何のこっちゃ？」

「料理は心だって……。機械の作るものにはそんなものがないって……」

「セリオとマルチの場合は、それは当てはまらねーな」

浩之は適切な回答をしたつもりだった。確かにそれは事実であり、あかりにもそれを納得させるのが筋だろう。だが、あかりは悲壮さを漂わせながら浩之に尋ねてきた。

「それじゃ、わたしの努力って一体何だったのお？」

そんなあかりの問いにも、浩之は真剣に答えるべく、

「一言で言ってしまうえばだな……」

と一旦言葉を切った。それを受けて、あかりも神妙な面持ちで、

「うん……」

と答えて、唾を飲み込んだ。

そして、浩之は真剣な表情のまま一言だけ告げる。

「無駄」

と同時に、にわか泣き出すあかり。

「うわあああん！」

さらに浩之の一言が続く。

「徒労」

あかりも泣きながら、叫ぶ。

『おねーさんの耳はロボの耳』第五話

「うそおおおおお！」

まだまだ続く。

「無為」

目をつぶって、「いやいや」のしぐさをするあかり。

「いやあああああ！」

あかりの反応が面白かったので、浩之はさらに続けようとしたが、適当な言葉が浮かんでこなかった。浩之の日常レベルでの語彙は少ないのだろう。

「えーっと…」

にも関わらず、あかりはそれだけで反応してしまう。

「やめてええええええ！」

「まだ言っていないって…」

「え？ あ、そうだったの？」

ようやく我に返ったあかりに、浩之が

「それで、ちよつとは気がすんだか？」

と聞くと、あかりは手を口に当てて、少し考え込んだ後に答えた。

「…もうちよつとかな？」

「んじゃ、勝手に泣いてる」

これ以上付き合うつもりがなかった浩之が冷たく言ったが、あかりはすっかり普段の調子に戻っていた。

「あ、ひどい…。とにかく、わたしの作った料理を食べてみてよ」

あかりのその提案にホイホイと従うわけにはいかない。浩之はわずかに怪訝そうな表情を作って、反論する。

「なあ、それってな…」

だが、あかりは屈託のない様子のままだった。もしかしたら、わざとそうしてるのではないか、と浩之は内心そう思っていた。

「うん、おいしいと思うよ」

『『思うよ』って何だよ、『思うよ』って…』

「わたしも少し食べたけど、よく分からなかったから…」

この辺の正直さはあかりらしいと言えるのだが、そんなことを言ってる場合でもない。

「そんなもんに食わせる気か？」

「だって心を込めて作ったんだし、浩之ちゃんに喜んでもらおうと…」

どうもさつきから一向に話が進んでないように感じた浩之は、こちらではつきりとさせべきだと思った。作ってきてくれたあかりに申しわけないとは感じていたが、言い出したら切りがないのだ。

「ったく…。それは嬉しいんだけどな、あかり」

「うん」

「その料理は食べれないぜ」

「どうして？」

「理由は…セリオに聞いてくれ」

浩之がセリオの名前を出すと、あかりはすっとセリオの方を向き、首をかしげていた。

「セリオちゃんに？」

すると、セリオはどこかから取り出した紙に何かの絵をさらっと描いて、それを見せながら尋ねる。

「あかりさん、その料理に特殊な調味料を使わなかったかしら？　こーんな感じのヤツなんだけど…」

「あ、それ？　うん、お母さんが試しに使ってみようって…。何でも滅多に手に入らない究極の調味料とか言ってたけど？」

「それってな、常習性と精神昂揚効果があるんだって…」

「え〜？　ホントにいい？」

「セリオのデータバンクは正確だぜ？　それに、お前だってそいつのおかげでおかしくなってたんじゃないのか？」

「そんなこと…ない？　あれ？　そう言われてみれば、お母さんがこれを出した時からの記憶がどうも曖昧なんだけど…」

浩之に言われて、改めて記憶の糸を手繰ってみると、どうにも曖昧な部分が多かった。

これは実のところ調味料のせいと言うよりは、睡眠不足と疲労などによる部分が占めているのだ。だが、曖昧なだけに、「原因はこれだ」と言われれば、それ以外に思い付かなくなるものだ。

「だろ？　きつとおばさんもそれでおかしくなってたんだよ…」

「…それは違うかも知れないけど…わたしが変になったのはそのせいかも」

「まあ、せっかく作ってくれた料理を食わないってのは悪いと思うけどな」

「ううん、わたしこそ、そんな危ないものを浩之ちゃんに食べさせようとしてたなんて……。本当にどうかしてたんだよ、きつと」

あかりが本当に落ち着いてきているのを見て、浩之は心底安心していた。どうやらセリオに対するわだかまりもなくなったようなので、ここでさらにとどめを刺しておこうと思いい、それを実行に移した。

「そうそう。そんな凝った料理なんかじゃなくてさ、あかりはあかり得意のやつを作ってくればさ、俺は喜んで食べるぜ？」

この言葉と優しい笑顔。ついでに歯がキラリと光れば言うこと無しなのだが、とりあえずはこれでばっちり決まったはずだ。

そして、その効果はてきめんだったようで、あかりは浩之を見つめてジワリと涙ぐみながら、つぶやいた。

「浩之ちゃん……。そうだね、わたしったら何でムキになってたんだろね？」

「オイオイ、泣くなつて……」

狙った通りに行った反面、泣かれるとは思ってなかったのだ、浩之はちよつとだけぼつが悪そうにしている。すると、そこにマルチとセリオがようやく入り込んでくるのだった。

「あかりさん、よかつたですわねー」

「見せつけてくれるわね。でも、あかりさんが辛いのはこれからのよ」

セリオの言葉の意味するところを、あかりは知らなかった。もちろん知っていれば調味料を使うことはなかったはずだ。

「え？ それってどう言うこと、セリオちゃん……」

きよんとした表情で尋ねるあかりに、セリオは腕組みをして答えた。

「例の調味料の禁断症状はね…食欲がすごく旺盛になることなの。だから、食べるのを我慢するか、摂取したカロリーに見合った運動を常に心掛けないといけないのよ」

「食べなければいいんでしょ？」

セリオの説明に対して、あかりは至極まっとうな思い付きを言った。だが、

「甘いわ。この禁断症状はね、鉄の意志を持った人たちをもコロコロと転げさせているくらいなの。食べないなんて簡単な方法で切り抜かれるものじゃあないのよ」

とセリオはやや厳しい表情でそれを否定する。

「え〜〜っ、それじゃどうすればいいの？」

単に食事を我慢すればいいと思っていたのに、それ自体が容易ではないと言われてはあかりになす術はない。だが、セリオは余裕の笑みを浮かべていた。

「苦しくならない程度に食べてしのごと言う手段があるのよ、ちゃんど」

「…それは？」

わらにもすがるような目つきであかりが尋ねると、セリオは自信たっぷりな調子でそれに答える。

「このわたしが作るダイエットメニューのみを摂取して、わたしが言う通りの運動をこなすこと」

「やるわっ！」

あかりの方も即答だった。それに気をよくしたのか、セリオは尋ねられてもいないことまでしゃべり出す。

「そーこなくちゃね。そもそも、この禁断症状に打ち勝つのに、必要なのは鉄の意志じゃなくて、鋼鉄の胃袋なのよね」

すると、あかりがそれに反応する。

「あ、それって、お母さんよ」

「へ？ それは何だよ、あかり」

突然出てきた「鋼鉄の胃袋」と言うキーワード自体が胡散臭いなど浩之は思っていたのだが、あかりの母親がそれだと言われてはどうしようもない。おまけにあかりが冗談で言ってるのではないことは、その表情から分かる。

「うちのお母さんはね、いくら食べても食べても、全然体型が変わらないの」

「まじかよ？」

ますます胡散臭い…と言う表情を作る浩之。だが、あかりの方は一向に変化がない。

「何でも若い頃に修行に出て、長ーく辛ーい旅路の末に、それを得たんだって昔聞いたことがあるもの」

「あかりの母さんって何の修行をしてたんだ？」

「そりゃ、料理に決まってるでしょ」

「料理ってお前なあ…」

「お母さんの包丁さばきだって達人技なんだから」

「へええ」

もはや真面目に受け答える気力を失っていた浩之を見かねてか、セリオがそのやりとりを中断した。

「まあまあ、それはともかくとして、さっそくメニューを作るから今日からしばらくは食事はこっちに来てくれるかしら？」

すると、あかりもすぐに話題を切り替えてくれる。

「ええ、いいわ。わたしも早く普通の身体に戻りたいし」

「あのとどころでさ…」

「それじゃ、今日これからの食事もそれでいいかしら？」

あかりの返事を受けてセリオが提案すると、あかりもすぐに賛成する。

「うん、よろしくね、セリオちゃん」

どうやら本当にセリオに対するライバル意識はないようである。それがあきらめなのか、あるいは一時的なものなのかまでは分からないが。

「こちらこそね、あかりさん」

にっこりと笑いながら、セリオがあかりに答えると、マルチも笑いながら、

「頑張ってくださいね、あかりさん」

と声援を送るのだった。

「あのお……」

そして、すぐにセリオが支度に取り掛かろうと、

「さて、それじゃすぐに支度するから、待っていてくださいね、あかりさん」

と言うと、あかりはセリオのそばに寄って、

「あ、わたしも手伝うよ、セリオちゃん。自分のことだしね」

と言った。

それを見て、マルチもその輪に入ろうとする。

「わたしも手伝いますー」

「…おい……」

それならばと、セリオはにこやかな表情で、二人に提案をした。

「それじゃ、みんなでやりましょ！」

「何だか楽しいね、こう言うのも」

「そうですねー。あかりさんも一緒に楽しいですね」

こうして、三人で仲良くあかりのダイエツトメニューの支度に取り掛かって行った。

「うわあ、セリオちゃん上手ねー」

「あかりさんだって、大したものよ」

「二人ともすごいですー」

藤田家の台所には明るい雰囲気溢れて、三人の楽しそうな声が響いていた。だが、一人だけ蚊帳の外にあったことを、三人ともすっかり忘れていた。

「……俺の晩メシはあ？」

一人だけ完全に無視されて、居間に残り残されていた浩之がその日の夕食に無事ありつけたかどうかは謎である。ただ、空腹のあまりに、あかりの持ってきた料理を全部食べてしまい、その後あかり以上の強力なダイエットを強いられたと言う噂も……合掌。

(続く)

『おねーさんの耳はロボの耳』第五話

『おねーさんの耳はロボの耳』第五話

初版:1997/09/18

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/08

PDF書式変更:2016/05/07